子育てアドバイス

やさしい気持ちを育てよう！

最近のニュースで悲惨な事件が報道され、その背景に幼いとき小動物をいじめていたことが伝えられ、悲しい気持ちになってしまう事もあるのではないでしょうか。

子ども達の好きなごっこ遊びも以前はお父さん、お母さん、子どもそしてペットなどで構成されていましたが、今は登場人物の中からお父さんの姿が消えています。子ども達は、お父さんお母さん役より、ペット役をやりたがることが多いのです。幼いなりに楽な方へと行動がいっています。本来子どもは本物志向です。おもちゃでも動くものが大好きです。動物のおもちゃは電池やねじで動くものがよくあります。それが生きて動くとなれば、喜びも倍増です。お母さんの使っている包丁やレンジ、掃除機などを自分で使ってみたいのです。「危ないからさわっちゃだめ！」と禁止されても、親の目を盗んでさわってみる機会を虎視眈々と狙っています。子どもは好奇心のかたまりで、大人の真似が最高の遊びのひとつです。そして、子どもが興味を持つおもちゃはミニチュア化したものです。

生きた子猫はぬいぐるみのように小さくて愛らしくても、おもちゃではありません。はじめに生き物で、ともに生活する仲間であることを、子ども達にわかるように伝えましょう。

赤ちゃんが家族に加わったとき、上の子どもが赤ちゃんをお人形さんのような感覚であつかい、抱き上げて落としてしまったり、「赤ちゃんは、もういらないから、あげてきて」「捨ててきて」などと言って、自分と同じ命のある存在だとはほとんど気づいていない状態です。まだまだ認識が十分に育っていないのです。

大人になった飼い猫や飼い犬は、人間との付き合いも長くなると家族一人ひとりの性格や行動をよく理解し我が身を守る術も身に着けているそうです。

不登校の子どもが家庭の中で孤立し、家族の言動に傷ついてものを投げたり、言い争いで大荒れになるとそっと忍び足で出て行く愛猫や、泣いている子どもの涙をなめてくれる愛犬の話をよく聞きます。いっしょになって涙を流す犬などは生活の伴侶というだけでなく、心の伴侶にもなっているのです。

幼い子どもは、親が本気になって教えようとすることは、心とからだで理解するそうです。大人の真剣さがいちばんの説得力なのです。言葉での抽象的な注意より、具体的に「抱くときにはこうするのよ。」などとお手本を示し、ちゃんとできるまで教え、できたらほめてあげる事です。

最近は犬や猫に遊んでもらえる本と言うのが出ていて、その立場からの話が出ていますが、相手の立場に立つというのが人間関係だけではないことがよくわかります。子どもの想像力が働く絵本や童話の読み聞かせもとてもいいことです。

はじめにふれていた犯罪を犯した少年たちが小さいとき小動物をいじめていたという話題がでることがありますが、共通の状況があるそうです。まず、親や大人から必要以上に厳しくしかられたり、体罰をあたえられたりしたとき、兄弟のいる子どもは下の子に、兄弟のいない子や末っ子は、自分より小さな子にあたっています。

親は疲れて余裕のないとき、自分のもっていきようのないいらだちや感情を、しつけを口実に子どもに吐き出しています。

子どもは自分が感情のはけ口にされていることに気づきます。でも反論できません。もっていきようもない怒りとストレスを、自分より弱いものや、物言えぬ抵抗をしない小動物へと矛先を向けるのです。この連鎖を断ち切らない限り、繰り返されるのです。

子ども達にとってもっとも必要なのは、大人達が人間的な寛容さとやさしさで接することで、子ども達はやさしくされることの経験をとおして、人にもやさしく接することを学ぶのです。

子育て支援センター
☎52-2315